

教育における 多様なコミュニケーションの姿について

上田紋佳, 横内理絵, 近藤淑子, 郭 始光, 藤田正紀, 白石秀寛
曾布川拓也(コーディネータ, 岡山大学)

1. 本研究の動機と意義

教育という営みは様々な要素を持っている。その中で学校教育においては、教師と学習者、また学習者同士の関わり合いが大きな役割を担っている。さらに昨今、学校現場を取り巻く環境の変化に対応するためには、教師同士の連携、教師集団の形成の必要性が特に重視されるようになった。また社会の変化に伴い、児童・生徒・学生を学校という枠組みの中でのみ教育するのではなく、より幅広く社会全体との関わり合いを持つことの重要性も論じられるようになった。その本質を表す言葉として「コミュニケーション」という用語が広く用いられている。

逆に「コミュニケーション」という概念を教育現場において考えたとき、学習者の発達段階、学問分野などその状況において色々な異なる形態が考えられる。学校教育に関する中心的・先駆的な人材養成を掲げる本研究科においては、従来より考えられてきた「コミュニケーション」だけでなく、これらの形態の違いを越えた横断的な見方による研究の必要性を感じた。一方でこれは、実際の学校現場における教師集団のあり方を模しているという見方もできる。

岡山大学研究チームは6名の学生とコーディネータから成るが、それぞれが全く異なる分野において研究を行っている。このことが逆に、横断的な手法による研究にさらに深い意義をもたらすものとの期待の下に本研究は行われた。

2. 研究の経過

本研究は次の3つの段階を追って進められた。

(1) 問題意識の確認と各分野における研究

本研究参加者はそれぞれが独立して研究活動を進めている。異なるそれぞれの分野を「教育におけるコミュニケーション活動」として見直し、その意義や問題点を明らかにすることが第1歩である。研究を始めるとに当たり、このような共通認識を持つことを目的とする打合せを行った(H20.4.14 16:00~17:30 岡山大学教育学部第2会議室)。

引き続き各自が自分の研究分野と教育におけるコミュニケーション活動との関連について研究を進めた。さらにこれを持ち寄って「学習者相互」「教師と学習

者」「教師相互、および学習者と外部」という、コミュニケーション主体による3つのタイプに分類することを考えた(H20.6.16 16:00~17:30 岡山大学教育学部コラボレーションセンター)。

ここまでの成果を、研究全体の構想・概要として第1回研究発表会において発表した(H20.6.21 構成四大学間テレビ会議システム)。

(2) 分野間相互の関連についての考察

第1回研究発表会の成果を踏まえ、異なる分野における「コミュニケーションの姿」についての比較検討を進めた。そしてその成果を学内研究会において発表した(H20.8.23 16:00~18:30 岡山大学教育学部5208教室)。特に分野が離れている参加者を指定討論者とし、議論が深まるようにした。また岡山大学大学院教育学研究科・桑原敏典准教授に本研究の主題である「教育現場におけるコミュニケーションについて」と題して社会科・公民科教育の立場を踏まえた講演を依頼、この問題について検討を深めた。

さらにこの成果を深めるため、D1セミナーを開催(H20.9.27~28 岡山いこいの村)、互いの分野に関する成果について質問書交換を含めながら分野間相互の関連について考察を行った。

(3) 全体のまとめと成果発表

第二段階までの研究で得られた成果をもとに、全体を総括して「異なる分野におけるコミュニケーションの姿の比較」を参加者それぞれが行い、このことについて学内研究会を開催した(H20.11.3 15:00~18:00 岡山大学教育学部5208教室)。この場では「自分以外の5名の参加者の分野におけるコミュニケーションの比較」として全員がそれぞれ講演を行った。その後の検討会において、「コミュニケーションを取り入れた授業活動における問題点」「コミュニケーションのあるべき姿」などについて詳しい議論が行われ、参加者相互の共通理解を見た。そしてそれらの成果を第2回研究会(H20.11.29 構成四大学間テレビ会議システム)で発表した。

さらに、1年次学生の必修科目である「教育実践基礎研究Ⅱ(実践研究課題演習Ⅰ,Ⅱ)」の授業(H21.2.27

)においてこの成果を改めて発表した。

3. 研究成果(I) 教育における色々なケースでのコミュニケーションの姿について

本節では、2(1)で述べた、色々なケースにおけるコミュニケーションの姿について報告する。

(1) e-learning システムを用いた不登校生徒への教育支援(担当:上田紋佳)¹

(a) 不登校生とへの教育支援に関する問題点

文部科学省は2003年に「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」において、不登校への対応にあたって5つの視点を提示している。すなわち、①将来の社会的自立に向けた支援の視点、②連携ネットワークによる支援、③将来の社会的自立のための学校教育の意義・役割、④働きかけることや関わりを持つことの重要性、⑤保護者の役割と家庭への支援、という5つの基本的な考え方を示した。つまり、不登校支援では、将来の社会的自立に向けて、様々な機関と連携をとって働きかけを継続し、子どもとその家庭を支援する必要性を強調している。このように文部科学省では、不登校を「『心の問題』としてのみならず『進路の問題』としてとらえ」、社会的に自立するための支援の側面を強調している。しかし、将来の社会的自立に向けた進路支援、特に学習支援に関しては、現段階では支援が制度化されておらず、課題が多いといえる。

(b) 研究・実践の目的

長期間引きこもり状態にある中学生を対象に、e-learning システムを用いたドリル学習の支援を行った。特に将来の社会的自立に向けて学習者が主体的に学習に取り組むこと、学校以外の機関による家庭への支援を含む継続的な関わりの2つを主に重点を置き、支援を行った。

(c) 実践の方法

地域の支援者を中心にWEB上での学習支援が行われた。地域の支援者は、学習開始までの情報提供や学習者のニーズの把握、学習のスケジュールの確認、定期的な学習の成果のフィードバックを行った。学習の内容は漢字の「読み」の学習であった。学習者はWEB上でほぼ毎日自発的に学習を行い、定期的に紙媒体によるテストを受けた。

(d) 結果および考察

実践の評価方法は、①学習者の学習成績の変化、②特性的自己効力感(成田ら,1995)(個人がある状況において必要な行動を効果的に遂行できる可能性の認知傾

向)の2つの観点によって評価する。

①学習者の学習成績の変化 学習者は90週分のドリル学習を186日で終わらせ、当初の予定より非常に早いペースで学習は進められた。学習が進むにつれて学習量が増えていき、テストの成績に日々の学習の積み重ねの効果がみられた。

②特性的自己効力感 特性的自己効力感の得点は、自己の学習成績のフィードバックの後で上昇していた。これらの結果より、総合的に判断して、ドリル学習に対する動機づけは向上したまま維持され、長期のドリル学習の達成という成功体験が自己効力感の得点の上昇につながった可能性が示唆される。

これらの実践により、地域の支援者を中心としたドリル学習の学習支援によって、不登校生徒の社会的自立に向けた一歩を踏み出すための力になれたように思われる。また、継続的な学習支援によって、孤立しがちな家族と地域の支援者との関係を強めることができた。しかし、この学習支援の実践を学校復帰または進学・就職などの進路の問題とどのようにつなげていくのかという課題が残されている。

(2) アスペルガー症候群を伴う子どものコミュニケーションと音楽による支援(担当:横内 理絵)

教師と学習者のコミュニケーションの形態は言語によるケースが多いが、それ以外の方法によることも考えられる。特に何らかの障害を伴う学習者に対しては、色々な方法が考えられる。特に音楽を用いることは様々な形で研究されており、本研究でも注目した。

(a) 研究・実践の目的 バイオリンとピアノのアンサンブル演奏を活用した音楽による支援が、演奏上のコミュニケーションに及ぼす影響について、検討すること。

(b) 実施の方法 対象児は、アスペルガー症候群と反抗挑戦性障害を伴う9歳の女兒である。

約1年間で計30回の支援を実施した。本研究では45分間で行われる内容のうち、特に最初と最後に実施するバイオリンとピアノのアンサンブルに注目して評価を行った。女兒はバイオリンを担当し、ピアノ伴奏者とアンサンブルを行った。女兒に対して、伴奏者とコミュニケーションを図りつつ息を合わせて演奏することを心がけるよう注意を促した。評価は、視線合致回数と身体の動きが同期した回数を中心とした行動観察を実施した。(c) 実践および観察の結果 視線合致回数と身体の動きが同期した回数について、言語プロンプト無しの状態では、伴奏者が一定のテンポで曲を演奏したが、A児は自分のペースで演奏を行い、アンサンブルは成立しなかった。そこで、「相手の目を見て様子を伺うこと」「相手の体の動きに合わせて演奏すること」といった言語プロンプトを与えた。後に、視線合致回数、体の動きが同期した回数ともに増加傾向

¹本研究は岩本真弓氏を中心とするマイクロステップ計測技術による不登校生徒支援プロジェクト(代表:岡山大学寺澤孝文教授)の成果の一部を報告するものである。

にあり、プロンプトを取り除いた後もその回数は維持傾向にあった。言語プロンプトを与えて以降はアンサンブルも成立し、プロンプトを除去する頃には伴奏者と息の合った演奏ができるようになった。

(d)結果に対する考察

視線合致回数や身体の動きが同期した回数の増加は、言語プロンプトを活用したためと思われた。A児にとって言語プロンプトは聞き入れやすく、また、定着しやすいため、視線を合わせることや同調することを促すきっかけとして有効であったと考えられた。

(3) 共同学習におけるピアフィードバックの活用について—学習者同士のコミュニケーション活動の学習効果—(担当：近藤淑子)

(a)はじめに

ピアフィードバックとは、学習者と学習者がお互いの作文にフィードバックを与えあう活動を通して学んでゆく共同学習である。学習者が「主体的な存在」であるためには「学習者中心」の活動をすべきであるが、このような共同学習はそれを実現できる環境と考えられる。特に学習者がお互いに有効なコミュニケーションを取ることで初めて学習が成立するため、それぞれが自覚を持って責任を果たすことが必然的に求められる。

(b)内容：インターネット掲示板(BBS)を利用したピアフィードバック

活動の形態は ①グループワーク ②BBS への書き込み ③BBSにおける対話 である。これによって学習者同士の効果、グループ活動の効果、BBS 利用の効果の相乗効果が期待できるものである。

(c)考察

BBS 活動におけるプラス点としては、情意的にとってもいいインターアクションができていて、面と向かっていないことから気兼ねなく意見を出すことができる、複数人がインターアクションを行うことでの気づきがある、インターネット上に作品(作文)掲載をする事がよい刺激になる、といったことが観察される。

一方マイナス点としては、他人の文章に対して批判的になるのが難しい、迷惑をかけることがわかっていながら協力的でない学習者がいる、他者に非常に影響を受けやすい傾向があり、前の人のコメントのやり方に合わせている場合が見られる、などがある。

(d)結論

共同学習を通じたコミュニケーション(BBS 活動を通しての学び)においては

- 1) 他の人の作文(複数)を読むことで学習
- 2) 他の人(複数)のフィードバックコメントを読むことで学習
- 3) 自己フィードバックを通しての学習(気づき)

ということが見られ、有意義なものであると考えることができる。

一方、今後の課題としては、モチベーションの学習者間の偏り、コミュニケーション不成立の可能性、学習者同士が対立する場面を回避する傾向にある、教師の介入の仕方に検討の余地がある、といったことがあげられる。

(4)分類学授業における教育目標の促進、及びコミュニケーションの働き(担当：郭 始光)

知識を機械的に記憶する事を要求しがちな状況は理科教育授業内でしばしば起きる、例として上げると生物学では系統分類、物理では様々な物理量、地学なら堆積学などがある。これらの内容の伝授で、ただ「紹介」、「解説」した後、生徒に「記憶」を要求すると、生徒は十分な理解が出来ない場合、「詰め込み」教育への抵抗から、学習する動機も減って行く恐れがある。従って、生徒が知識の応用、分析、そして最後に自分の能力として身に着ける教育目標まで辿り着くことは難しくなる。

生物の系統分類学は自然現象の「多様性」に対し、それを理解しようとするために定めた「基準」(測定基準、単位)から成る。分類学は「多様性」を認知、研究するための手段であり、「多様性」への認識も人それぞれ多様であり、知識の記憶と同時に論議の空間は十分ある。生徒にさまざまな基準を与え、材料を調査する方法もあるが、教育目標から最後身に付けて貰いたい素質を考えると、基準の「提出」と「評価」が更に重要になる。そのため、系統分類学における実践を一番最初から体験させると同時に、生徒同士のコミュニケーションを積極的、徹底的に導入する方法がある。その中で注意すべき点は以下である：

(a)コミュニケーションの場を作る：教師として、知識の伝授の過程でコミュニケーションの空間が多く存在することを意識する。

(b)コミュニケーションの実行：生徒はまず独自の観察で結果を出し、全員の結果をお互いに知らせる。相補するもの、矛盾するもの、どうやって結果を統一するか、討論させる。

(c)コミュニケーションの統合：教師の指導により、全員納得できる観察の項目、比較する基準を全員で統一する。統一した結果から、このような結果を導く原因、効果などを、想像力を駆使し考えさせる。

(d)コミュニケーションの意義：生物の知識だけではなく、学習の動機、考える方法を、コミュニケーションを通して獲得させること。分類学授業中の教師と生徒、生徒と生徒のコミュニケーションを十分に生かす事により、異なる見方の触れ合い、自分の意見の主張、他人の意見を取り込み、最後は一つの答えとは限らない、

どの答えも正しい所と、不十分なところがある事に気づき、「学諸分野の根本的な法則を、生きた知識となるように学習」するための基本能力を養うことができよう。

(5) 公民科教育における体験学習ーチャレンジメニューを通したコミュニケーションの考察ー(担当:白石秀寛)

(a) 研究の目的と内容について

本研究は、地方自治の主体的な担い手を育成することを目指して、高等学校の公民科において生徒が地域社会の諸問題の解決に取り組み、その活動を通して、知識理解にとどまらず地方自治の理念に基づく判断や意思決定、さらには市民としての行動の基盤となる態度の形成とを旨とした単元開発及び実践をおこない、その過程における生徒相互、生徒と教師、教師間のコミュニケーションの特徴を考察し、その意味や役割を分析することを目的とする。現在の高等学校公民科の学習は、市民性育成という観点から評価すれば様々な問題を抱えていると言わざるを得ない。第一は、教師主導による一方通行の講義中心・暗記主義の授業がなされていることである。コミュニケーションは一方的になる場合が多く、恣意的で誘導的になり、生徒が、授業において社会の様々な問題について自分なりに考えたり判断したり、活動したりする機会が極めて少なく、試験のために出来るだけ多くの知識を暗記する学習にとどまっている。第二は、生徒の問題関心を無視した学習がなされていることである。国際化・グローバル化に伴って、教科書においても温暖化をはじめとする地球環境問題や、異なる民族の対立に起因する民族紛争の問題が取り上げられているが、それらが生徒に真に切実な問題として受け止められているかは疑わしい。一見、生徒の日常生活とはかけ離れているかのように見える問題を、そのギャップを埋めることなくただ情報として伝えても、高校生は受け止められないばかりか他人事としてすぐに忘れ去ってしまうであろう。本研究は、このような現在の公民科が抱える問題点を克服するために、チャレンジメニューにおいて生徒が身近な地域社会の課題を取り上げ、それらの解決に取り組む授業を通して、地域の一員として求められる判断や行動の基盤となる態度を形成し市民性を育成するという過程におけるコミュニケーションの機能について考察した。

(b) 実践の概要

対象は高等学校1年生10クラス(計411名)である。各クラスごとに、生徒は次の7つのメニューから一つを選ぶ。

- ① 新聞作成班(1～2班:4～5名)
- ② 地域PRビデオ作成班(1班:4～5名)

- ③ 地域調べ班(1～2班:4～5名)
- ④ 労働体験班(1班:5名)
- ⑤ 熊日新聞の投稿班(1～2班:5～4名)
- ⑥ 裁判制度を調べる班(1班:5名)
- ⑦ 税を考える班(1～2班:5～4名)

生徒たちは以下のようなスケジュールで活動を行った。

①前期:教科書「民主社会と日本の政治」の授業。同時にメニュー選択、班構成、活動計画作成。(7月末まで)

②夏期休業中:調査・体験活動

③後期(i):教科書「経済のしくみと日本の経済」の授業。レポート提出、発表準備。(11月まで)

④後期(ii):メニューの評価。課題に取り組む過程及び報告・発表を総合的に判断して、定期考査として評価する。(2月まで)

(6) 教師側集団と学習者の全体としてのコミュニケーション～化学実験の教材開発を通じて～(担当:藤田正紀)

化学の実験教材実施の流れは次の通りである。

- ① 教材の開発
- ② 教材のねらいを担当者で確認
- ③ 実験条件の確認(予備実験)
- ④ 生徒実習実施
- ⑤ プリント・テストで評価
- ⑥ 担当者で反省
- ⑦ 改良した教材へ反映

この段階においてさまざまなコミュニケーションの必要性があげられる。

(a) 実施前

・担当教師間:指導上の注意点を確認事故発生の危険性の確認

・実習担当教員と:準備・片付けの段取りを確認実施手順の確認

(b) 実施中

・生徒と:実験の目的、注意点について

・実習担当教員と:実施手順の再確認注意点の徹底

(c) 実施後

・実習担当教員と担当教師:実験内容の理解ができたか単元との関連が理解できたか。実験の改善点の検討

4. 教育におけるさまざまなタイプのコミュニケーションの比較

(1) 教師と学習者のコミュニケーションの活用(担当:近藤淑子)

コミュニケーションは、教育現場、特に授業運営において重要なポイントと言える。生徒は、目的に応じて学習を成立させ実りある教育成果へとつなげられるよう、場合により他の生徒と協力し合いながら、コミ

コミュニケーションを成立させることが必要である。教師は有効なコミュニケーションの成立を目指しコーディネーターとしての役割を果たすことが必要である。以下は、特殊な分野ではあるが、コミュニケーションの成立により学習を促すケーススタディと言えよう。

(a)e-Learningの利用

昨今広く普及しているITは教育のツールとして期待されている。特に上田らの実践研究はコミュニケーションの取り方になんらかの困難さを抱えているように見える学習者、例えば不登校児などにとってゆういぎになることを示している。

- ・社会的な接触を絶った不登校児に対し、インターネットを通じた学習支援を行うことで自信や自己肯定感を取り戻させ、社会復帰を目指す。

- ・直接コンタクトに限定しないコミュニケーションを通して学習を促す。

- ・対象児童・生徒に関わる人たちがその児童・生徒と何らかのコミュニケーションをとることにより、社会との関わりをもつ方向に促す。

*教師はこのシステムを提供し、対象生徒の学習到達評価のフィードバックを行い、この支援に関わる人たちともコミュニケーションを取りアドバイス等を行うことで不登校児支援に関ることが必要である。

(b)非言語コミュニケーション

障害者など特別な支援を要する学習者にたいするコミュニケーションとして、言語以外のものをもちることが近年特に注目されている。特に横内の研究をみると

- ・特殊教育において、他者とコミュニケーションをとる訓練を行うための支援を行うもの

- ・どちらかという感性に関わる非言語である音楽を通しての療育。

- ・特殊な分野ではあるが、近年増加傾向にあり、社会的問題にもなっている発達障害支援の一形態である。というような状況が明らかになっている。この際にかかることとして、一般の人たちのようなコミュニケーションを自然にとることができない生徒は必ず何かの支援療育が必要になる。その中で、他の人たちとのコミュニケーションをとるやり方を学ばせるために教師は1対1で根気よく関わってゆかなければならない。

(c)共同学習におけるピアフィードバックの活用

かつての教育においては、教師対学習者という一方向のコミュニケーションがほとんどであった。それに対し、近藤の実践研究はインターネット上に作文とそれぞれのコメントを提示し、複数生徒の書いたものを目にすることで学びを促進する共同学習である。その方法は

- ・学習者と学習者(ピア)がお互いの英作文を批評しな

がら、作文を書き直しへとつなげる

- ・その中でインターネット上の掲示板(BBS)を使ったフィードバック活動に焦点をおいている

- ・従来の作文に教師が添削を加える英作文指導ではなく、学習者主導である

というものであり、従来はあまり見られなかったものである。それと同時に、現在広く普及しているインフラストラクチャを用いて実施できることから、今後広く使えるものであると思われる。

(2) 教師相互、学習者および外部とのコミュニケーションのあり方(担当：白石秀寛)

教育におけるコミュニケーションの主体は、教師対学習者だけでなくさらに広く行われている。このときに必要なのは、主体それぞれがもつ役割について明らかにすることである。

(a)教育目標の明確化とコミュニケーションの役割

郭の研究は教育におけるコミュニケーションの持つ意義についてその本質を深く考えなおしたものである。生物学の学習において、生徒たちは暗記が中心でおもしろくないという印象を持っている。特に系統分類において、この傾向が強い。このようなことは他の理科においても見受けられる。しかし、生物授業における分類学は「諸分野の根本的な法則を、生きた知識となるように学習」するための基本能力を養うために重要な機能を持っており、それは「多様性」を認知、研究するための手段であり、決して暗記中心の内容ではない。では、生徒に対して分類学が重要であると同時に、単なる暗記ではないことをどのようにすればわかってもらえるか。その重要な役割を持っているのがコミュニケーションである。それは授業において、一方通行ではなく相互におこなわれる教師と生徒、生徒と生徒のコミュニケーションを十分に生かす事によって実現できる。具体的には教師が意識的にコミュニケーションの場を作る。観察結果をお互いに共有し、多様な結果をどのようにまとめるか、討論させる。教師は、観察の項目、比較する原則を導き、その原因、効果などを考えさせる(コミュニケーションの統合)。その結果として、生物の知識だけではなく、学習の動機や考える方法をコミュニケーションを通して獲得させることができる。

(b)教師集団と学習者のコミュニケーション

藤田の研究は化学実験におけるコミュニケーションの実態・必要性について報告したものである。生徒の関心を高め、より充実した化学実験を教材化する際に、生徒相互、生徒-教師、教師-教師のコミュニケーションを重視したフィードバックを繰り返し、評価、改善をおこなうことを計画した。具体的には、①教材のねらい、実験計画、留意点について予備実験をしなが

ら担当教師間で共有する。(教師間のコミュニケーション)②実験の際に生徒に目的, 注意点, 手続き, レポートについて確認し合う。(生徒・教師間のコミュニケーション)③実験の準備状況, 実験の進行状況, 片付けなどの確認(教師間のコミュニケーション)④実験の際の生徒観察, 生徒の疑問や質問への対応をおこなう(生徒・教師間のコミュニケーション)⑤実験の際の生徒の協力状況(生徒相互のコミュニケーション)などである。これらの多様なコミュニケーションを伴う実験結果については, レポートや評価テストを通して次回の実験教材開発へとフィードバックしていく。今後のより質の高い実験教材開発の際に, 生徒のコミュニケーションの機会を増やすことが重要な鍵になると思われる。

(c)学校外とのコミュニケーション

白石の研究は, 高等学校公民科における課題学習に基盤を置いている。公民科の重要な目標である「市民性の形成」のために, 学校内外で様々な体験活動(チャレンジメニュー)を行ったが, 各場面において考察した。それは(ア)各メニューを決定と班決めの場面(イ)各班の企画会議の場面(ウ)各班の体験活動の場面(エ)体験活動及びレポート作成の場面(オ)プレゼンテーション準備作業の場面(カ)プレゼンテーションの場面(キ)チャレンジメニュー運営に関わる職員間の場面である。それぞれは次のように分類できる。

①生徒相互におけるコミュニケーション

i) リーダーによるトップダウンA型…すべて指示していくタイプ(迅速)

ii) リーダーによるトップダウンB型…必要に応じてメンバーの意見を取り入れるタイプ

iii) リーダーによる合意形成型…すべて, メンバーの合意を得ながら進めるタイプ

②職員間他のコミュニケーション

i) 地歴・公民科全体でのコンセンサス

ii) 担当者4名のコミュニケーション…計画の説明から始まるコンセンサスの形成

iii) 他教科とのコミュニケーション…教科「情報」, 図書との連携

iv) 事務, 管理職, 地域とのコミュニケーション…予算, 計画の説明

③コミュニケーションの効果

どの場面においても, コミュニケーションに対する配慮を計画的におこなうことにより, 相互理解が深まることが報告されている。生徒においては, 授業への関心が高まり, よくわかるようになり, 意欲が出てきた。特に発表学習においては, 通常の授業よりも真剣に取り組むことができた。その際, 重要なことはコミュニケーションの雰囲気作りであり, その要素である教師の態度や各職員の対応の態度や人間性も大きな影響力

を有する。何よりも, コミュニケーションを上手につないでいくことが大切である。

5. 教育におけるコミュニケーションの本質

それぞれの比較研究を通じて, 教育におけるコミュニケーションのあり方について, 次の2通りにまとめた。

(1)教育におけるコミュニケーションの姿(横内 理絵)

本プロジェクトテーマの目的は, 以下の3つである。

①教育の様々な分野におけるコミュニケーションの形をそれぞれ明らかにする。

②多様なコミュニケーションについて, その共通点や相違点を明らかにする。

③教育において必要とされるコミュニケーション能力について検討し, そのあり方について明らかにする。

本節では, 第2の目的である共通点と相違点を検討した上で, コミュニケーションの本質について考えつつ, 第3の目的であるコミュニケーション能力について言及する。

・共通点

① 基盤には, 人間同士の意思疎通(コミュニケーション)があり, その上にそれぞれの分野における目的がある。どの分野のどのような形態のコミュニケーションであっても, 伝える側は相手にわかってもらいたい, 聞く側は, 相手の伝えようとしていることをわかりたいと思っていなければ(意思疎通), 目的も達せられない。

② コミュニケーションを図ろうとするとき, 自分の考えや思いを託す媒体を使用している。人から人へ考えや思いを伝わるときには, 多くの場合, 発話によって意思疎通を図るが, 具体的なものを介して行われていることが多い。特に, 非言語的なコミュニケーションであればそれはより顕著であり, 媒体を介することでコミュニケーションを容易にする。

相違点

① それぞれの分野によって, コミュニケーションの先にあるもの(達成したい目標)が異なる。どの分野であっても, 基本的に人と人が意思疎通を図るという部分でコミュニケーションするというところに大きな違いはないが, コミュニケーションすることによって生じる結果(生じさせたいこと)は, それぞれの分野によって目指す方向が違っている。

② それぞれの分野によって, コミュニケーションを図る環境が異なる。①で記述した, 各分野の目的が違えば, その目的を達成するために最も適切な環境も異なる。これは教師—学習者, 学習者—学習者, 教師相互—学習者—外部, あるいは, 人—人, 人—パソコンなどの環境の違いが挙げられる。

コミュニケーション能力

① みんなに必要なこと

教師や学習者といった立場に関わらず、コミュニケーションを図る上で必要なことは、(伝える側であれば)相手にわかってもらいたいと思う気持ちであり、(聞く側であれば)相手の伝えたいことをわかりたいと思う気持ちである。

② 教師に必要なこと

以上を総括して、コミュニケーションを円滑に行うために教師ができることは、「相手に自分の考えや思いを伝えたい、相手のことをわかりたいと思わせるような環境を整えること」、次に「コミュニケーションを容易にする媒体を用意すること」を提案する。最後に「それぞれの分野の目的を達成させるために必要な共通の言葉」を設けることができれば、より専門性の高いコミュニケーションを図ることが可能となるのかもしれない。

(2)教育におけるコミュニケーションの本質(郭 始光)

『大辞林』で「コミュニケーション」を引くと「人間が互いに意思・感情・思考を伝達し合うこと。言語・文字その他視覚・聴覚に訴える身振り・表情・声などの手段によって行う」、「教育」を引くと「ある人間を望ましい姿に変化させるために、身心両面にわたって、意図的、計画的に働きかけること……」、という内容が出てくるように、「教育」行為自体が「コミュニケーション」に取まれており、「コミュニケーション」は教育手段の総括とも言えるだろう。教育をコミュニケーションの角度で捉える場合、コミュニケーションの相手、内容、目的、手段、時間、場所など様々な要素を考慮することが出来るが、相関の高い要素をまとめると、コミュニケーションの相手(内容、目的)と手段(時間、場所)に注目することにする。現実の教育過程で起こるコミュニケーションは教員と生徒、教員同士、生徒同士と分けることができるが、この中で従来型とも言える教師と生徒の間、かつ教師が主導する意外のコミュニケーションも注目すべきだと思う。例えば：

①基本的な平等なコミュニケーション：教師生徒お互い話し合い、同一点、相違点を統合し、一つの結論を出すと言う平等な形を取っている(郭)。

②生徒中心、主導するコミュニケーションける体験学習を通したコミュニケーションについて」：生徒の共同調査活動、チームワークの養成、結果発表、自己PR能力の養成。(白石)

③教師同士のコミュニケーション：実験現場におけるコミュニケーション、生徒の安全の確保、経験の交流など。(藤田)

また、コミュニケーションの手段として、新しい技術の発展により、より効果的な手段を開発したり、従来の方法では困難だった相手に対し、より有効なアプローチを探る活動を行っている。例えば教室内での1対1、教室外ではBBSを活用(近藤)、インターネットドリルとマイクロステップ法評価で不登校生徒の支援(上田)、音楽によるコミュニケーション(横内)。このように、誰に主導権を渡すのかにより教育過程で起こるコミュニケーションのバランスの存在を意識し、教育目的、内容により、異なるバランスの使い分けが望ましいであろう。また、さまざまなコミュニケーションのアプローチにより、確実に伝え合えることを確保することを目指さなくてはならない。

6. コミュニケーションを積極的に取り入れた授業において留意すべきこと (上田紋佳)

(1)はじめに

教育現場や授業において、コミュニケーションは重要なものであり、積極的に取り入れるべきであるといった考え方が暗黙の了解となっている。しかし、コミュニケーションを重要視した授業を実践する場合、それがもたらすポジティブな効果を検討すると同時に、授業の際に留意すべき点についても十分考える必要があるだろう。授業においてコミュニケーション場面を作り出すことによって、従来の授業では想定されていなかった問題点や課題が生じる可能性が考えられる。本節では、授業においてコミュニケーションを取り入れる際に、留意すべき点について考察する。

(2)学習者に対して配慮すべきこと

学習者に対する配慮として、①コミュニケーションの成立条件、②コミュニケーションの対立、③コミュニケーション時の学習者の役割分担の3つについて、以下にそれぞれ考察する。

①コミュニケーションの成立条件 コミュニケーションを取り入れた授業を行うためには、学習者間でのコミュニケーションが成立している必要である。学級崩壊などやクラス替え直後で、学習者間の人間関係が構築されていない状況では、まず人間関係の形成を優先すべきであろう。

②コミュニケーションの対立 意見の対立によって、当事者同士の関係性が授業後も悪くならないような配慮が必要である。また、自己主張がうまくできない子へのサポートも大事である。

③コミュニケーション時の学習者の役割分担 議論などにおける主導権を一部の子どもが握ったり、知識の不足によって議論に参加できなかったりすることがないように、役割が偏らないように工夫し、コミュニケーションの機会を平等に与えるべきである。

(3) 教員、指導者における留意すべきこと

教員は上記で述べた、コミュニケーションを取り入れた授業における様々な状況に対応することが必要となる。このようなコーディネータとしての教員の役割は、従来の「教える」ことが中心の授業では重要視されなかった教員の役割であろう。また、コミュニケーションを重要視した授業を行うことによって、教員の負担はますます増えることは明らかである。授業数の確保、複数の教員による実施、教科横断的な指導計画の作成など、従来の授業と比較してコストは大きい。さらに、どのような目標を教員・学習者が設定し、どのようなことをもって評価させるのか、といった評価の難しさもあるだろう。

(4) コミュニケーションを取り入れた授業をより効果的に行うために

コミュニケーションを取り入れた授業を効果的に行うために、まず、教員間、学習者間、また教員と学習者間の信頼関係が形成されていることが望ましい。また、学習者のコミュニケーションに対するモチベーションを高めることも重要である。本稿で考察した問題や課題をクリアするために、以下の2点が考える。第一に、多数の教員によって体系的に計画・実施されることが重要であると考えられる。第二に、コミュニケーションを取り入れるかどうかの使い分けが必要であると考えられる。授業内容によっては、従来の「教える」授業方法の方が有効である可能性も十分ある。そのような使い分けを考える際に、本プロジェクトで紹介された実践が参考になるであろう。本プロジェクトからは、学習者の思考を深めたりや意欲・関心を高めたい場合に、コミュニケーションを取り入れた授業が有効ではないかと考える。

7. 研究のまとめ (藤田正紀)

我々の研究はそれぞれこれまで見てきたように、様々なコミュニケーションから成り立っているが「一人ひとりを大切にする教育」という観点でまとめることができる。

- ・ 不登校児の支援としてe-learningを利用し個人の進度にあわせた学習システムを開発している(上田)
- ・ アスペルガーという、共同歩調をとることが難しい生徒を支援するため、音楽楽器を用いた個別指導のあり方を研究している。(横内)
- ・ 相互批評による英作文力の伸長を図ることにより、不参加生徒をなくし、全員の英作文力を高める目的の研究である。(近藤)
- ・ 従来の一斉授業では、暗記中心にならざるを得ない植物の分類を、班による話し合いにより、生徒間の共通認識を深めかつ、価値観の個人差を理解させる。正

解が1つではないところもこの分野を教材に選ぶ価値を高いものとしている。(郭)

- ・ 興味・関心に応じた課題への取り組みを通じて全員が、研究方法を学び、発表力を培う。(白石)
- ・ 安全で効果の高い実習を模索することによりみんなの興味・関心を養い知識の定着を図る(藤田)

教育には個別の指導とともに、集団活動を通して学ぶことも重要であり、そのどちらもが、一人一人を大切にすることを目標としているといえるのではないだろうか。

(とりまとめ：コーディネータ・曾布川拓也)